



Title	Pragmatism and Language in S.T. Coleridge
Author(s)	中村, 仁紀
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57885
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【26】

氏 名	なかむらよしき 中村仁紀
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 8 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	Pragmatism and Language in S.T. Coleridge (S.T. コールリッジにおけるプラグマティズムと言語)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 玉 井 暲 (副査) 教 授 森 岡 裕 一 教 授 服 部 典 之 准 教 授 片 岡 悦 久 准教授 石 割 隆 喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリスの 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて活躍したロマン派の詩人・批評家であるサミュエル・テイラー・コールリッジ（1772－1834）を取り上げ、特に詩論、言語論、哲学論を展開したその後期作品のもつ重要性に注目し、コールリッジが伝統的な経験論形而上学の枠組みにとらわれつつも、プラグマティズムにもとづいた独自のロマン派詩学・言語論を構築するに至った過程とその意味を考察した研究である。論文は、序論、本論 5 章、結論、および注、参考文献から構成されており、論全体で英文で 146 ページ、和文 400 字詰め原稿用紙に換算して約 550 枚に相当する論文である。

「序論」において、コールリッジの後期作品、たとえば『生命の理論』（1816）、『政治家の手引き』（1816）、『文学評伝』（1817）、百科事典『エンサイクロペディア・メトロポリターナ』への「序論」（1817）、『哲学講義』（1818－19）、『瞑想のた

めの手引き』（1925）などの散文作品を取り上げ、これらの著作のなかで展開される形而上学的言説において、コールリッジが思弁的考察を実行すればするほど語彙そのものについての検討や新しい語彙を創造・増殖する営みへと関心が脱線していくという言語的行為の特質が見られることを指摘する。そのうえで、この言語運用のありようのなかにコールリッジ固有のロマン主義観を検証していくのが本研究の目的であると述べ、本論における大きな見取り図を明らかにする。

第 1 章は、コールリッジについて指摘されるマージナル・メソッドと呼ばれる会話的な思考様式について、超越論的側面とみずからの経験にもとづいてさまざまな変容を実践するプラグマティックな側面とをあわせもっている特質を確認する。

第 2 章は、コールリッジがキリスト教信仰と自由意志の問題を論じた『瞑想のための手引き』を取り上げ、宗教的精神性の領域と知覚的経験の領域とを区分けして議論を展開しているありようを検証し、コールリッジが経験を知識化するに当たり言語機能の妥当性について反省的意識をもって言語運用を行っている事実を指摘する。

第 3 章は、コールリッジが仮説を前提にして思考を展開する科学的方法論を重視しつつも、プラトンのイデア論に惹かれる側面をもっていたという内面的緊張関係の所在を、『生命の理論』と「方法論について試論」（1816）の分析を通して解明する。

第 4 章は、コールリッジがイタリアの歴史哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコから影響を受けた歴史感覚について考察を行い、一方には歴史を思考の生成の場と捉えるプラグマティックな感覚が、他方にはキリスト教神学ないしはロマン派想像力をめぐる形而上学的理論が窺えるという二面性が見られる事実を明らかにし、この両面の間の相克がコールリッジの思考と言語の特質を形成するものであると主張する。

第 5 章は、コールリッジの辞書学への関与のあり方を問題に取り上げ、みずから取り組んだ百科事典『エンサイクロペディア・メトロポリターナ』に対して補完的に添付されている英語のレキシコンのもつ意味を解明しようとする。文献学者として言語資料を歴史的に厳密に収集・整理する姿勢を見せる一方で、曖昧な同義語を用いてみずからの基準・判断による定義づけ（desynonymization）を辞書編集に持ち込むという、恣意的・主観的言語操作が見られることを明かし、歴史的に捉えられる言語を知の道具へと変容を図ろうとするプラグマティズムと、正しい言語使用による文化的知の先導をめざすエリート主義的哲学者との二面性が共存している事実を指摘する。

結論では、本研究は、コールリッジのプラグマティズム的思考の発生を検証することにより、これまで脱構築批評によって明らかにされていた自己解体的な思考形式について、言語を通して知を解体しつつ再構築を求める実践的思考として評価の見直しを図った研究であることを改めて強調し、本論を終えている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、イギリス・ロマン派の詩人兼批評家であったサミュエル・テイラー・コールリッジを対象にして、『生命の理論』、『政治家の手引き』、『文学評伝』、百科事典『エンサイクロペディア・メトロポリターナ』およびその「序論」、『哲学講義』、『瞑想のための手引き』などに代表される散文作品を取り上げ、これらの著作においては、脱線的・会話的言説、あるいは語彙の増殖を図る言語使用という言語運用上の特質が見られることを指摘

し、その意味を考察した研究である。この研究により、文学批評家コールリッジにあっては、いかなる命題を信じるかではなく、いかなる語彙を使用するかに最大の関心があったこと、しかしそれにもかかわらず、伝統的な経験論哲学や観念論・表象主義にもとづく発想が根強く残存していることを明らかにし、さらに、この新・旧の二面的傾向による相克が窺えるありようを鮮やかに解き明かすことができたのは、大きな研究成果である。本研究はまた、コールリッジの自己解体的な思考形式の原風景をポジティブな地平から再評価する視角を切り拓いた論考としても高く評価できる。従来、コールリッジ研究の世界にあっては、特に日本においては、哲学的・形而上学的色彩の濃いこれらの後期作品を真正面から研究対象とする姿勢は希薄であっただけに、この意欲的な研究は注目すべきものと言えよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。コールリッジの言語論について、文学言語・詩的言語に特化した議論がいくらか脆弱であったことが惜しまれる。また、議論をより一層平易に展開する工夫が求められよう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。